

参考・引用文献

本書は多数の既往文献、資料を参考に執筆、編集されたものです。本来は、本編中に参考とした文献の著者名と公表された年を記すべきところですが（図の引用など一部は本編中にも記載）、本書の性質を踏まえ省略しました。参考・引用した主な文献を以下にまとめて記載します。

- 馬場敬次・林健一・通山正弘 (1986): 日本陸棚周辺の十脚甲殻類. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 遠藤広光 (2005): 土佐の魚と分類学, p. 80-89. 海洋高知の可能性を探る, 高知新聞企業, 高知.
- 遠藤広光・岩崎望・町田吉彦・岩井雅夫・門馬大和 (1999): 曳航体カメラによる室戸沖深海底生性魚類および甲殻類の予備調査. JAMSTEC 深海研究, 14, 411-420.
- 外来種影響・対策研究会 (2008): 河川における外来種対策の考え方とその事例【改訂版】
ー主な侵略的外来種の影響と対策ー. リバーフロント整備センター, 東京.
- 浜田哲暁・佐藤重穂・岡井義明 (2006): 外来種ヒゲガビチョウ *Gerrulax cineraceus* の四国における記録と繁殖. 日本鳥学会誌, 55(2), 105-109.
- 平岡雅規・寫田智 (2004): 四万十川の特産品スジアオノリの生態学. 海洋と生物, 26(6), 508-515.
- 平岡雅規・田中幸記・田井野清也・蜂谷潤 (2012): 温暖化最前線の藻場変動と対応策. 海洋と生物, 34 (4), 314-318.
- 平田智法・山川武・岩田明久・真鍋三郎・平松亘・大西信弘 (1996): 高知県柏島の魚類相
ー行動と生態に関する記述を中心としてー. 高知大学海洋生物教育研究センター研究報告, 16, 1-177.
- 石田実 (2006): 日本太平洋岸のマイワシ産卵量の急減と土佐湾に継続する産卵場の特性.
水産海洋研究, 70(3), 170-175
- 蒲原稔治 (1958): 浦戸湾内の魚類. 高知大学学術研究報告, 7(13), 1-11.
- 環境庁 (2000): 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ーレッドデータブックー爬虫類
両生類. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- 笠原昊 (1950): 日本近海の捕鯨業としての資源. 日本水産研究所報告, 4, 1-103.
- 片野修・海野徹也・谷口順彦編 (2011): アユの科学と釣り ー美しい川とアユを願ってー.
学報社, 東京.
- 加藤秀弘 (1995): マッコウクジラの自然誌. 平凡社, 東京.
- 加藤秀弘 (2000): ニタリクジラの自然誌. 平凡社, 東京.
- Kato, H. (2004): "Kujira-damari", Fantastic whale aggregate place of large whales in Tosa Bay.
Farming Japan 38(6), 17-21.
- 加藤秀弘 (2005): 土佐の鯨溜まり. 海洋と生物, 27(6), 627-631.
- 加藤秀弘・中村玄 (2012): 鯨類海産哺乳類学(第二版). 生物研究社, 東京.

- Kato, H. and W. F. Perrin (2009): Bryde's whale. Encyclopedia of Marine Mammals, 2nd edition, Academic Press, New York.
- Kato, H., E. Shinohara, T. Kishiro and S. Noji (1996): Distribution of Bryde's whales off Kochi, Southwest Japan, from the 1994/95 sighting survey. Rep. int. Whal. Common, 46, 429-436.
- 木白俊哉 (2012): 西部北太平洋、特に南西部日本縁談におけるニタリクジラの資源生態学的研究. 東京海洋大学大学院博士学位論文.
- Kishiro, T., H. Kato, T. Miyashita, I. Ishii, T. Nakajima and E. Shinohara (1997): Abundance of Bryde's whales off Kochi, estimated from the 1994/95 and 1995/1996 sighting surveys. Rep. int. Whal. Common, 47, 163-168.
- 高知大学黒潮圏研究所 (1991): 黒潮のナゾを追う. 高知新聞社, 高知.
- 高知県 (2012): 平成 23 年度高知県集落調査報告書. 高知県, 高知
- 高知県観光振興部観光政策課 (2012): 平成 23 年県外観光客入込・動態調査報告書. 高知県, 高知.
- 高知県・高知県牧野記念財団 (2009): 高知県植物誌. 高知県, 高知.
- 高知県緑の環境会議山村研究会 (1995): 「国際化」時代の山村・農林業問題 ー再建への模索・高知県からの報告. 財団法人高知市文化振興事業団, 高知.
- 高知県内水面漁業共同組合連合会 (1992): 土佐の川 全県編 (依光良三編). 高知県内水面漁業共同組合連合会, 高知.
- 高知県レッドデータブック [動物編] 編集委員会 (2002): 高知県レッドデータブック [動物編] 高知県の絶滅の恐れのある野生動物. 高知県文化環境部環境保全課, 高知.
- 高知市・国立大学法人高知大学 (2009): 高知市総合調査受託研究成果報告書 第 1 編「地域の自然」. 高知市・国立大学法人高知大学, 高知.
- 高知市・国立大学法人高知大学 (2010): 高知市総合調査受託研究成果報告書 第 2 編「地域の社会」. 高知市・国立大学法人高知大学, 高知.
- 目崎拓真 (2008): 四国のサンゴ群集 ー日本のなかでの四国の位置づけー. CURRENT, 9 (1), 2-3.
- 目崎拓真・久保田賢 (2012): 高知県沿岸海域における造礁サンゴ群集の変遷. 海洋と生物, 34 (4), 332-337.
- 森下郁子 (2011): ダム湖生態系の時間的变化, p. 60-80. ダムと環境の科学Ⅱ ダム湖生態系と流域環境保全 (大森浩二・一柳英隆編), 京都大学学術出版会, 京都.
- 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳 (2001): 以布利 黒潮の魚. 大阪海遊館, 大阪.
- 中西安男・吉川貴臣・清家晴男・久川智恵美・吉澤未来・山崎博継・大地博史・三宅由起・濱田早絵・渡部孝 (2005): 高知県におけるオオイタサンショウウオの保護活動. 動物園水族館雑誌, 46(4), 125-130.
- 日本ベントス学会 (2012): 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会, 東京.
- 日本建築学会 (1989): 図説集落. 都市文化社, 東京.
- 野元彰人・木邑聡美 (2011): 高知県におけるシオマネキ(スナガニ科)の新たな生息地の記録と分布状況(2). 四国自然史科学研究, 6, 1-5.

- 岡田正也・小松章博 (2012): 高知県奈半利川水系における在来アマゴの識別と個体群構造の推定. 水産増殖, 60(1), 89-97.
- 大塚高雄・野村彩恵・杉村光俊 (2010): 四万十川の魚図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.
- 阪本匡祥・町田吉彦・遠藤広光 (2009): 浦戸湾とその流入河川河口域の魚類. p. 415-473, 高知市総合調査受託研究成果報告書第1編「地域の自然」, 高知市・国立大学法人高知大学, 高知.
- 佐藤重穂 (2009): 四国山地東部の三嶺山麓におけるソウシチョウの営巣記録. 四国自然史科学研究, 5, 24-26.
- 佐藤重穂・浜田哲暁・山本貴仁 (2007): 四国地域におけるチメドリ科外来鳥類の定着実態の解明. 四国外来鳥類研究会, 高知.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (1996): 日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社, 東京.
- Shinohara, G., H. Endo, K. Matsuura, Y. Machida and H. Honda (2001): Annotated checklist of the deepwater fishes from Tosa Bay, Japan, p. 283-343. In Deep-sea fauna and pollutants in Tosa Bay, edited by T. Fujita, H. Saito and M. Takeda, Natl. Sci. Mus Monogr.
- 篠原重則 (1991): 過疎地域の変貌と山村の動向. 大明堂, 東京.
- 多田昭・大原健司 (2010): 四国におけるビロウドマイマイ属の分類—特にトサビロウドマイマイとシコクビロウドマイマイについて—. 徳島県立博物館研究報告, 20, 37-42.
- 高橋勇夫・東健作 (2006): ここまでわかったアユの本 変化する川と鮎、天然アユはどこにいる?. 築地書館, 東京.
- 高橋裕 (2012): 川と国土の危機 水害と社会. 岩波書店, 東京.
- 田中幸記 (2008): 高知県西部海域の藻場分布 その1 ～藻場分布の現状～. CURRENT, 9 (3), 4-5.
- 田中幸記 (2009): 高知県西部海域の藻場分布 その2 ～藻場分布の変遷～. CURRENT, 10 (1), 2-3.
- 内田朝子 (2002): 矢作川中流域におけるアユの消化管内容物. 矢作川研究, 6, 5-20.
- 上野俊一 (1976): 四国のオオイタサンショウウオ, p. 8-11. 幡多の自然, 高知県.
- 山田ちはる・伊谷行・上田拓史 (2010): 高知県浦ノ内湾におけるミドリイガイの生息場所利用と水平分布. Sessile Organisms, 27, 41-50.
- 山中二男 (1978): 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 高知.
- 全国生涯学習フォーラム高知大会環境プロジェクト委員会 (2010): 高知県の自然環境 (全国生涯学習フォーラム高知大会実行委員会・四国自然史科学研究センター・環境の杜こうち編), 全国生涯学習フォーラム高知大会実行委員会, 高知.

用語集

<アルファベット>

BOD

Biochemical Oxygen Demand（生物化学的酸素要求量）の略。河川の水質汚濁の度合いを示す代表的指標。水中の有機物等の汚濁物質が微生物により無機化される際に消費される酸素量で表し、数値が大きいほど汚濁が進んでいることを示す。

ICPP

Intergovernmental Panel on Climate Change（気候変動に関する政府間パネル）の略。国際的な専門家で構成され、地球温暖化についての科学的な研究の収集、整理のための政府間機構。2013年9月には第5次評価報告書第1作業部会報告書が公表された。

IPM 農法

IPMはIntegrated Pest Management（総合的病害虫管理）の略。病害虫や雑草防除において、化学合成農薬だけに頼るのではなく、天敵や農業資材など様々な防除技術を組合せ、農作物の収量や品質に経済的な被害が出ない程度に発生を抑制しようとする考え方の農法。

PDCA サイクル

Plan（立案・計画）、Do（実施）、Check（検証・評価）、Action（改善・見直し）の頭文字を取ったもの。行政政策や企業の事業評価にあたって、一連の作業を繰り返し、継続的に向上を図るという考え方。

SS

Suspended Solids（懸濁物質）の略。水の濁りの指標となり、水中に含まれる有機物や無機物の鉱物などの量（水 1L）を表す。

<あ>

愛知目標（愛知ターゲット）

生物多様性における戦略計画として、2050年までに人類が自然と共生する世界を実現することを目指し、2020年までに生物多様性の損失を食い止めるための効果的かつ緊急の行動をとるという国際的な目標。

赤潮

極めて多数の植物プランクトンが一海域に急激に大発生し、水域が変色する現象。有毒な植物プランクトンが増殖した場合には、貝毒の発生など甚大な漁業被害をもたらす。

磯焼け

沿岸海域において藻場を形成する海藻類が消滅してしまう現象。いったん磯焼けが発生すると、藻場の回復までに長い年月を要し、磯根資源の生育不良や減少を招いたりするなど、沿岸漁場に影響を及ぼす。

一級河川

国土保全上又は国民生活上、特に重要な水系として政令指定された水系（一級水系）に係る河川。国土交通大臣が指定する。

エコツーリズム

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験して学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のあり方。

塩性湿地

塩沼ともいう。海に近いため潮汐の影響により時間帯によって海水・汽水に冠水し、常に湿潤な状態となっている砂地や泥地。塩生植物の群落が形成される。

塩生植物

海浜・海岸砂丘・塩湖岸など塩分の多い土地で生育可能な植物。

<か>

海底谷

海底の狭くて深くぼみで、両側は急な斜面をなす地形。大陸斜面上に特徴的に形成される。

外来種

国外や国内の他地域からある地域に人為的に導入されることにより、本来の自然分布域を越えて生息又は生育することとなる生物種。このような外来種の中には、導入先の生態系、農林水産業や人の生命・身体へ著しい影響を生じさせるものが存在する。

河道

河川の流水が流下する土地空間。通常は堤防または河岸と河床で囲まれた部分をさす。

河道内の樹林化

土砂供給の減少、河道掘削等の影響によってみお筋（河道内で普段水が流れているところ）が固定化し、河床が低下する一方で、砂州は肥大化する。砂州の陸化の進行によって草化し、砂等の細粒分がそこで補足されるようになることで、樹木の侵入、生育が促進される。

環境保全型農業

農薬や化学肥料の使用を抑え、自然生態系本来の力を利用して行う農業のこと。農業のもつ物質循環機能を活かし、環境と調和した持続可能な農業生産のあり方として、行政による誘導施策がとられている。

環境ホルモン（内分泌攪乱物質）

環境中に存在する化学物質のうち、生体にホルモン作用を起こしたり、阻害したりする物質。

希少種

一般的には、生息数が少なく希にしか見ることができない種を指す。レッドリスト掲載種や、「種の保存法」に基づき指定された国内希少野生動植物、国際希少野生動植物を指して使われることもある。

希少野生動植物

種の個体が著しく減少しつつある野生動植物、生息・生育地が消滅しつつある野生動植物、生息又は生育環境が著しく悪化しつつある野生動植物、その種の存続に支障を来す事情のある野生動植物のいずれかであること。高知県でも一部の種の個体が減少する状況にあり、積極的な保護施策の実施を図り健全な自然環境を将来に継承するため、高知県希少野生動植物保護条例が施行（平成18年7月）された。

汽水域

河川などから流入する淡水と海水とが混合して形成される塩分濃度の低い水が、恒常的にあるいは季節的に存在する水域（河口域や内湾など）。

魚道

堰堤など魚の遡上が妨げられる箇所で、遡上を助けるために設置される工作物。

近自然工法

洪水の危険性を軽視せず、大気、水、土壌の働きと生態系の食物連鎖の関係を本来の自然に近づけることを目的とし、地域の自然素材を活かしながら自然との共存を図る河川改修工法。

グリーンツーリズム

農産漁村地域において自然・文化、農林漁業とのふれ合いや人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動。

黒潮

フィリピンの東方海域に端を発して北上し、東シナ海、トカラ海峡を通過して太平洋へ出た後、足摺岬沖で東向きに進路を変え、日本の太平洋岸を東へ流れる暖流。世界の海流の中で、北大西洋のメキシコ湾流とともに最も強大な海流である。黒潮は貧栄養で植物プランクトンが少なく透明度が高いため、海色が黒く見えることから「黒潮」と名付けられた。

公益的機能

一部の人だけが受ける恩恵ではなく、多くの人たちに利益をもたらす機能をさす。森林の場合は、生物多様性の保全、土砂災害の防止、水源の涵養、保健休養の場の提供など。

高水敷・低水敷

洪水の時に水かさが増して浸かる場所を高水敷、通常の状態では水が流れている場所を低水敷という。

構造線

地層群同士又は地塊同士の境界線（地体構造の境界線）。

高知県環境基本計画

高知県環境基本条例第9条の規定に基づき策定される、高知県の環境の保全及び創造に関する施策を総合的かつ計画的に推進するための基本となる計画。平成23年4月に第三次計画が策定された（最初の計画は平成9年2月に策定）。

高知県環境基本条例

高知県の環境行政のうち最も基本となる条例（平成8年3月）。森林、農村環境及び清流の保全など高知県ならではの環境を再評価する項目を盛り込んでいるとともに、「都市部と中産間地域との連携の推進」という県政の重要課題である中産間地域対策を位置づけたことなどが特色として挙げられる。

高度成長期

飛躍的な経済成長を遂げた時期。日本では、1950年代半ばから1970年代初頭までの期間。

<さ>

在来種

地域の環境条件に適応し、以前から存在した種。

里地里山

長い歴史の中で、さまざまな人間の働きかけを通じて特有の自然環境が形成された地域であり、集落を取り巻く二次林と人工林、農地、ため池、草原等で構成される地域概念。

砂礫堆

砂や砂利が河床にほぼ一直線に形成されている砂洲。

サンゴの白化

海水温の上昇などにより、サンゴの体内に共生している褐虫藻が体外に排出されるなどして、サンゴが白く見える現象。白化した状態が継続すると、サンゴは褐虫藻からの栄養が得られないため、死滅してしまう。

資源管理型漁業

資源に対する過度の漁獲圧力を低減させ、地域の漁業や資源の状況に応じた禁漁期、禁漁区の設定、漁具、漁法の制限等自主的な管理を実施して、資源の再生産と有効利用を適切に図りつつ漁業経営の安定化を目指す漁業のあり方。

自然再生事業

過去に損なわれた生態系やその他の自然環境を取り戻すことを目的として実施される事業。

準絶滅危惧種

レッドリストにおいて「絶滅危惧（Ⅰ類、Ⅱ類）」に準ずるランクとされる、存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

人工林

苗木の植栽や播種、挿し木などにより造られた森林。スギ・ヒノキが代表的な樹種。

森林環境税

高知県では、森林の環境を守るために通称「森林環境税（法制上は県民税均等割の超過課税）」として個人・法人県民税に500円（年額）が加算され、その税収が森林環境の保全に使われる。

水源涵養（かんよう）機能

森林土壌や水田土壌など降水を貯留し、河川へ流れ込む水の量を平準化して洪水を緩和するとともに、川の流量を安定させる機能。

水質汚濁防止法

公共用水域の水質汚濁の防止に関する法律（昭和 45 年 12 月）。第 1 条に目的が記載され、「この法律は、工場及び事業場から公共用水域に排出される水の排出及び地下に浸透する水の浸透を規制するとともに、生活排水対策の実施を推進すること等によって、公共用水域及び地下水の水質の汚濁の防止を図り、もつて国民の健康を保護するとともに生活環境を保全し、並びに工場及び事業場から排出される汚水及び廃液に関して人の健康に係る被害が生じた場合における事業者の損害賠償の責任について定めることにより、被害者の保護を図ることを目的とする。」とある。

生物多様性国家戦略

生物多様性条約において締約国が策定する生物多様性の保全と持続可能な利用に関する国家的な戦略であり、生物多様性基本法（平成 20 年 6 月）において政府による策定を義務づけている。

絶滅危惧種

レッドリストにおいて、次の 3 つのカテゴリー（分類群によっては IA 類と IB 類をまとめて絶滅危惧種としている）に掲載されている種。

- ・絶滅危惧 IA 類：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。
- ・絶滅危惧 IB 類：IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。
- ・絶滅危惧 II 類：絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられる種。

遷移

生物群集の組成が時間とともに変化する過程。この移行が進んで最終的に成立する群集を極相という。

相観

植物群落の一般的な外観。生活形・密度等によって決まる。植物群系の分類に用いる。

雑木林

かつては用材にならない雑多な木からなる林の意味で用いられた。広葉樹などの二次林で、薪炭林、農用林などとして使われてきたものが多く、里地里山の中心的存在。

<た>

体験型・交流型観光

画一的な観光コースをまわる周遊型観光と異なり、観光客がその場所でどのように過ごすかという「体験」を重視する観光形態（時間消費型観光）。そのため、必然的にその観光には各人の趣味や嗜好が色濃く表れることとなり、テーマ性の非常に強いものとなる。また、比較的長い滞在を即するものであり、同一の趣味嗜好が継続する限り、観光客が何度でもその観光地を訪れるような観光形態でもある。

大陸棚・大陸斜面

大陸棚とは、大陸あるいは島のまわりに隣接し、勾配が小さく深所に向かって著しい傾斜の増大が生じるまでの地帯をいう。通常、水深 200m 程度より浅い平らな海底をさす。大陸斜面は、大陸棚外縁から沖へ向かって深海へ下る斜面をいう。

多自然川づくり

河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮し、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出するための河川管理。

棚田

傾斜地に階段状に造られた稲作地。棚田は雨水の保水・貯留による洪水防止、水源の涵養、多様な動植物や貴重な植物の生息空間や美しい景観の提供などの様々な役割を果たしている。

段丘状地形

河川、海、湖に沿って、あるいは谷筋に沿って分布する階段上の地形。ほぼ水平で平坦な地表面（段丘面）とその前方あるいは背後の急傾斜な崖（段丘崖）からなる。

地域個体群

地域性に着目して特定される個体群。移動能力のそれほど高くない生物は、同じ種でも地域によって遺伝的特性や生態的特性が異なることが多く、地域個体群という概念が用いられる。

地塊山地

周囲から断裂して分かれた地殻の一部を地塊といい、その一部が隆起して成長した山地。

地球温暖化

地球表面の気や海洋の温度が長期的に見て上昇する現象。この原因として、石油や石炭等の化石燃料の燃焼や森林の減少等による温室効果ガス（二酸化炭素など）の増加が指摘されている。

地産地消

地域で生産されたものをその地域で消費すること。単に地域の食材を消費するだけでなく、「もの（食材）」を通して「人（心）」がつながることが原点であり、食農養育や食育、食文化の伝承と活用、生産者の生きがいや消費者の安心・信頼、さらには食を柱とした生き活きとした地域づくりへとつながっていくことを目指す。高知県では、経済発展を目的として、地産地消を徹底した上で、他地域において高知県の物産が消費される取組を進めており、これを地産外商という。

沖積層

約2万年以降に形成された比較的新しい地層。河川等により運ばれた泥土等が堆積して形成される層であり、一般に軟弱であることが多い。日本の平野部の大部分は沖積層からなる平野である。

潮間帯

満潮時に水没し、干潮時に露出する部分。上から高潮帯、中潮帯、低潮帯に分けられる。

低炭素社会

化石燃料の消費等に伴う温室効果ガスの排出を大幅に削減し、世界全体の排出量を自然界の吸収量と同等のレベルとしていくことにより、気候に悪影響を及ぼさない水準で大気中温室効果ガス濃度を安定させると同時に、生活の豊かさを実感できる社会。

特定外来生物

生態系等に係る被害を及ぼし、又は及ぼすおそれがあるものとして、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」（平成16年6月）によって規定された外来生物。同法で規定する外来生物は、海外から日本に導入されることにより、その本来の生息地又は生育地の外に存することとなる生物をさす。環境省が指定。

特用林産物

林野から産出される木材以外の産物。うるし、きのこ等。

都市計画法

都市の健全な発展等を目的とする法律（昭和43年6月）。第1条に目的が記載され、「この法律は、都市計画の内容及びその決定手続、都市計画制限、都市計画事業その他都市計画に関し必要な事項を定めることにより、都市の健全な発展と秩序ある整備を図り、もつて国土の均衡ある発展と公共の福祉の増進に寄与することを目的とする」とある。

土壌捕縛力

樹木の根系が有する土壌層を繋ぎ止めておく力。

<な>

内水面漁業

湖沼・河川等の内水面で行われる漁業。

二級河川

一級水系以外の水系で、公共の利害に重要な関係があるもの（二級水系）に係る河川。都道府県知事が指定する。

二次林

何らかの原因により、植生が強くあるいは頻繁に攪乱された後に成立した二次遷移の途中にある森林。

<は>

波食

海岸に打ち寄せる波による浸食作用。

干潟

干出と水没を繰り返す平坦な砂泥底の地形で、内湾や河口域に発達する。浅海域生態系の一つで、多様な海洋生物や水鳥等の生息場所となる。

富栄養

栄養塩負荷量が大きく、それによって植物プランクトンが多く発生する状態。「富栄養化」は、時間とともに栄養塩負荷量が増加するといった進行の状態を示す。

ブルーツーリズム

島や沿岸部の漁村に滞在し、魅力的で充実した海辺での生活体験を通じて、心と身体をリフレッシュさせる余暇活動。

圃場整備

既成の水田や畑をよりよい基盤条件をもつ農地に整備する一連の土地改良のこと。

<ま>

緑の回廊

種の保全や遺伝的な多様性を確保するため、野生生物の生息・生育地を結ぶ移動経路を確保することによって個体群の交流を促進し、保護林相互を連結してネットワークを形成するもの。

木質バイオマス

樹木の全部又はその一部をチップやペレット等にして得られる木質産物。最近ではエネルギー源としての利用を促進するため、燃焼技術の開発、燃焼方法、ガス化等の研究が進められている。

藻場

大型の底生植物（海藻、海草）の群落。魚介類の産卵場や餌場となるなど沿岸地域の生態系において重要な役割を果たしている。

<や>

焼き畑農業

森林や原野を刈り払い、倒した樹木や草本などを燃やしてから灰を肥料としてイモ類、雑穀類等を栽培する農業の手法。数年間にわたり作付けした後、肥料分がなくなると畑を放棄して別の場所に移転する。放棄された耕作地は他の土地を焼き畑・耕作している間に植生が回復し、再び焼畑として利用できるようになる。循環的に資源を利用する、古くから続く伝統的な農業形態。

要注意外来生物

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」（平成 16 年 6 月）による規制の対象外であるものの、すでに日本に持ち込まれ、生態系に悪い影響を及ぼす恐れのある生物。環境省が指定。

<ら>

リアス式の地形

狭い湾が複雑に入れ込んだ沈水海岸の地形。

留鳥

一年中同じ地域で生活し、季節による移動をしない鳥の総称。日本ではスズメ、カラス、キジ、ヤマドリが代表的。

冷水病

アユが細菌に感染しておきる感染症。国内では昭和 63（1988）年に徳島県で初めて確認され、それ以降、各地でアユ漁業に多大な影響を与えている。

レッドデータブック

レッドリストに掲載された種について、その生態や生息状況、減少要因等を取りまとめ、出版物として発刊したもの。

レッドリスト

絶滅のおそれのある野生生物のリストで、「絶滅危惧Ⅰ類」、「絶滅危惧Ⅱ類」等のカテゴリーにランク付けされている。全国的な観点から環境省が作成しているほか、都道府県等も各々の区域に生息・生育する種についてのレッドリストを作成している。